



ましみずの里

～幸せをつかむため、自ら考え行動する子供～

天童市立高揃小学校
学校だより No.7
令和7年11月20日
校長 鈴木博志

子供の自立を促す魔法の言葉

「先生、コンパス忘れました。」

算数の授業が始まった時点で、こんなことを言ってきた子供がいたとします。そんな時、私たち教師はどのような対応を心がけているのかご紹介します。

A：「今日の授業からコンパスを使うから、絶対に忘れないようにとっておいたでしょう。もう知りません！」

B：「それは困ったね。じゃあ、今日は先生の予備のコンパスを貸してあげるから、次からは忘れないようにするんだよ。」

C：「それは困ったね。それで、どうするの？」

Aは冷たい対応です。教師としてはコンパスを忘れた子供に反省を促すつもりで厳しい言い方をしているのかもしれませんが、子供の心に残るのは、反省の気持ちよりも教師に見放されたという気持ちです。これでは、子供に自立した力を育てることはできません。

Bは優しい対応です。子供が困らないように、教師側から救いの手を差し伸べています。しかし、見方を変えれば、子供が負うべき責任を教師が肩代わりしているとも言えます。これだと、「困ったときには先生が解決してくれるんだ」と誤った学習をしてしまう可能性があります。これも、子供の自立にはつながらない対応と言えます。

Cは、厳しい対応です。子供に起きた問題については、子供自身に問い返し、解決を委ねます。教師にできることは、そのサポートをすることです。

子供：「先生、コンパス忘れました。」

教師：「それは困ったね。で、どうするの？」

子供：「うーん、先生のコンパスがあるなら貸してほしいんだけど・・・。」

教師：「ごめんね。先生は予備のコンパスを持っていないんだ。」

子供：「うーん、じゃあ、隣の人をお願いして貸してもらいます。」

教師：「そうだね。自分で解決策を考えられたね。」

子供の身に起きたトラブルは、本来、子供自身の力で解決するべきものです。安易に大人が手を貸してしまうと、たとえそれが優しさからだったとしても、子供の自立

裏面（2枚目）もご覧ください

